

# 連載講座

第49回

## 「国家衛生原理」のPR（一）・後藤新平

作家 童門冬二

### PRの真義

“おこもりぐらし”を忠実に守っている。その間いろいろと考えた。最も頭の中を占めたのは「コミュニケーション」のむずかしさと、住民の意識改革の至難さだ。約五〇年近く前に都庁にいて、この仕事に専念した。テーマがあった。「都政の主人は都民である」ということの、都政関係者への普及と、都民への自覚の促しだ。マスコミにも頼んで（パブリシティ）いろいろ努力したが、現在でもその成果が挙げたとは思えない。シジフォスの神話で山路の斜面を石を押し上げるような歯がゆさがいまだに残っている。

“おこもりぐらし”で「ではこの仕事で苦労した歴史上の人物はいなかったらどうか」と物色してみた。この仕事というのは、“PR”のことだ。“パブリック・リレーション”といわれ“公衆関係”と訳される。正直云ってこの訳では何のことかわからない。作業としては“アウトプット（出力・広報）と入力（インプット・広聴）のフィード・バック（それも広聴によって広報の逸（はやり）を抑制して）、住（国）民の意識を変える。ということのようだ。

私は広報室長の時、大手の広告会社の社長の書いた本からこのことを学んだ。つまりPRは宣伝ではない。行って来いのノコギリ的意識の作業だということだ。それによって“大衆”を“公衆”の位置にアウフヘーベン（止揚）することなの

だ、ということ。

この事業に積極的に取組んだ人物を探した。見つけた。後藤新平だ。

後藤新平といえば“都市づくり”の権威で大正12年9月の関東大震災の後の「東京の復興」に努力した人だ。「東京の復旧ではなく復興だ」と云った。復旧は「元の姿に戻す（旧姿の復元）だが、「復興は違う。創造性を新しく加えることだ」と新平は云った。

震災では、橋が少ないために被災者の多くが隅田川に飛び込んで死んだ。川の水が熱湯化していたからである。このことに痛ましさを感じた新平は、数本の橋を架ける計画を立てた。この時のかれは内務大臣で、自ら立案し新しく設置した復興院の総裁だった。

“都市づくりに寄せる夢の一端を実行する。画家に橋のデザインを描かせたことである。「橋は単に渡る施設ではない。観賞に耐える文化性を備えなければならない」。

新平の“橋の哲学”だ。

実際に画家に「自分ならこういう橋を架けたい」という想像図を描かせ、それを技術家に渡して「参考にしてくれ」と告げた。語調は「参考にしてくれ」ではなく「この絵のような橋を架ける」だったかも知れない。

よく知られているように、かれの東京復興には、「近代国家日本の首都としての東京」のイメージがあった。

「西の京都をただ東に移した」

東京だとはかれは考えていなかった。

「世界に誇れる日本国の首都東京の創造」

をめざしていた。だから橋一本といえども簡単にはかんがえない。

「一本一本が芸術作品である」

あるべきだと考えていた。

## “医学普及”の汎国民的努力

“大風呂敷”といわれ、計画も予算も十分の一に縮小されてしまった“復興計画”の中でも、数本の橋の架橋や昭和通りの施行は残った。隅田川に架けられた橋のデザインは一本一本が独創的だ。

前置きが長くなったが、都市づくりに天才的な閃きをみせる後藤新平が、生涯を通してやり遂げたい、と希った事業がある。

「医学思想の普及」

である。そのPRだ。

都市づくりはいわば“ハコモノ”による夢の実現で、ジャンルとしては“ハード”に入る。PRは人間の意識に関することだから、“ソフト”に入る。意外に思われる方がおられるかも知れない。

しかし新平にとって、都市づくりはいわば容器(いれもの)づくりであって、かれにとって重要なのは、

「その中に入る中身即ち住民」

なのだ。東京においては「東京市民」が大切なのだ。

折角、新しい創造性を駆使して、

「世界に誇れる首都」

を造っても、住む市民が「誇りをもって住みこなせるかどうか」も含めて、かれにとって「医学の普及」は大切な事業であった。

「国家衛生原理」というかれの著作が、その拠る

べき原典だが、この本での主張が新平の事業の根幹だ、といってもいいだろう。

東京復興も台湾統治も満鉄の経営も、NHKの育成も、ひとつひとつ取りあげれば、

「ひとつの事業が、それぞれひとりの人間のすぐれた能力を必要とする」

ような性格と内容を持っている。かれに系統的な学歴はない。

「かれが最も嫌ったのは東京大学法学部の出身者であった。しかし“人材発見と登用の達人”といわれるかれが、最も多くの人材を発見し、登用したのも東大法学部出身者であった」

というカラカイ半分のような評が残されている。“おこもりぐらし”中に私が発見したのが、「国民への医学の普及」であり、そのために行なったかれのPRの数々だ。考えようによっては、

「かれの行なった諸事業もすべてPRの一環ではないのか」

とさえ思えるのである。

お読み下さる方の中にはおそらく、

「問題設定が大袈裟すぎる」とか、

「医学の普及が汎国民的テーマなのか」

等々、お叱りを含めたご批判をお持ちだろうと思う。しかし私は、私が“おこもりぐらし”中も、寧日なく近くの道路をサイレンを鳴らしながら病院に向う消防庁の救急車や、その救急車が搬送した感染者は、スムーズに受け入れられだろうか等、ヒトゴトとは思えない(いつでも自分のことになる、そしてなっても不思議ではない、今はそういう世の中なのだ、例外は全くない)、という自覚と不安を考えると、今回提起する、

「後藤新平の“医学普及のPR”の考察も、全く無縁ではない気がするからである。

(この項つづく)